

第2問

次の文章は、山川方夫^{やまかたむさお}「暑くない夏」（一九六二年発表）の全文である。これを読んで、後の問い（問1～7）に答えよ。なお、設問の都合で本文の上に行数を付してある。（配点 45）

「……夏が来たのね」

女は、天井を見上げたままにいった。

白い天井。白い壁。白いシート。女の顔も白い。

「空を見ていると、わかるの。ついこないだまで、どんよりと空の濁った日ばかりがつづいてたわ。まるで、水に落ちたケント紙のような色の空だったわ。……それが、見てごらんない、あんな真青な色になって、むくむくした力こぶみたいな雲が見えるわ」

女は^(ア)声^{おと}を落し、彼に笑いかけた。

「もう、一年になるのね」

うなずいて、彼も窓を見やった。窓の外は、一面に濃い群青の夏の空だ。——この部屋は五階だ。なるほど、ベッドに寝たきりでいるのだったら、見えるのは空しかない。

「学校の話しようか？」

二人は、大学のクラス・メートだった。が、女はちがう返事をした。

A
「お願い。窓のカーテンを閉めて」

彼はカーテンを引いた。女は、大きな呼吸をした。ふざけたような声でいった。

「……私には、もう、夏も冬もないの。私はもう、なにも感じないわ。暑くも寒くもなく、いつも気密室に入っているみたいなのよ。みんな、他人の夏、他人の冬でしかないの」

何万人、いや、何百万人に一人という奇病だった。去年の夏、突然高熱を発した二十歳の彼女は、そのまま全身が動かなく

なった。

20 意識は明瞭だが、五官の感覚がほとんどなく、あとは死を待つほかはないのだ。医者は、最大限一年しかもたないと明言した。その一年の期限が、もはや目の前に来ている。

部屋がむしむしする。彼はハンカチで汗をふいた。わざと明るい声でいった。
「うらやましいよ。暑さ知らずだなんて」

女は、目のすみでちらりと彼に笑った。

25 「そうね。いまに文化が進歩して、人間たちが気温を一定に調節して、この世から夏や冬を追放することになるのかもしれない。……私、そんな未来の国に住んでみたいね」

「そうさ」と、彼もいった。

「そうしたら、夏や冬は、季節の名前じゃなく、土地の名前になっちまうさ。金持ちだけがそれを味わいに出发て行く、遠い

B土地の名前に」

「夏や冬は、つまりぜいたく品になるのね」

30 笑って、女は目をつぶった。

「……でも、夏は、もう私にははつきりとは思いつけない。夏、夏っていくら考えても、なにか子供のころに聞いた海岸の物音みたいな遠いぼやけた思い出しか、私にはもう浮かばないの。……ねえ、夏って、どんなものだったの？ 暑いつて、どんなことなの？」

35 青く血管の透けるような白い頬で、女は、でも、固く目を閉ざしていた。ふいに、涙がその目じりからあふれた。頬に光の筋を引いた。

……やがて、彼は立ち上がった。涙の線をのこしたまま、女は眠っていた。彼は、いつもと同じように、その女の顔を、これが最後かもしれぬという気持でしばらくみつめてから、病室のドアを押した。病院の表へ出た。

女の声が、まだ耳に聞こえていた。——ねえ、夏って、どんなものだったの？ 暑^Cいって、どんなことなの？

突然、彼は足をとめた。夏の街を歩きながら、彼はひとつも暑くないのだ。むしろ、はだ寒ささえ感じられる。

あわてて、彼はあたりを見た。戦慄^(ウ)に似たものが、彼を走りすぎた。いつのまにか、まぶしかった夏の充実した日射しは消

え、どこにも夏がないのだ。——彼にも、夏がないのだ。

空は暗く、季節の消えた街を、不気味な冷えた風が動いている。

「暑くなったり、急に寒くなったり、ほんとにへんな陽気ですわね」

「ほんとに。さっきまであんなに照りつけていましたのに。……あら、雨だわ」

中年の女の二人づれが、話しながら足早やに通りすぎる。頭にハンカチをのせ、近くの果物店に駆けこむ。彼は、息を吐いた。

夕立が来ようとしているのだ。

D やっと、彼に夏がかえってきた。彼は歩きだした。

空が翳^{かげ}り、落ちてくる大粒の雨の中で、だが、彼は自分にも夏がないと感じたいまの一瞬の記憶を、心の中でしっかりと握りしめるようにしていた。そのときだけ、彼は彼女の住む「未来の国」にさわり、その記憶だけが、彼女を彼につなぐ、ただ一つの手がかりであるのかもしれない……。

急速に空に黒い雲がひろがり、雨脚^{しげ}が繁^{しげ}くなった。わざと夏のその雨の中を歩きながら、彼は、ハンカチで顔をふきつづけた。

(注) ケント紙——純白で紙面が緻密な上質の図画用紙。

問 1 傍線部(ア)～(ウ)の語句の意味として最も適当なものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解

答番号は

13
)
15

○

15

(ア) 声を落し

13

- ① 声にならない声で
- ② 声に代えて目つきで
- ③ 声にするのを止めて
- ④ 声を低くして小声で

(イ) 明言した

14

- ① 明るく言ってみせた
- ② はっきり言い切った
- ③ よく聞こえる声で言った
- ④ 明瞭に言い放った

(ウ) 戦慄に似たもの

15

- ① 驚きとも言える感情
- ② 打ちのめされるような感情
- ③ 昂なかぶりと見まがう感情
- ④ おののきに近い感情

問2 傍線部A「『お願い。窓のカーテンを閉めて』」とあるが、「女」はなぜこう言ったと考えられるか。その理由の説明とし

て最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 16。

- ① 自分に見える唯一の空の景色はようやく明るい夏がやって来たことを告げ知らせているが、衰弱して横たわっている身にはその光景が思いのほか眩しく感じられ、姿勢を変えられないだけに辛くなってきたから。
- ② 自分が唯一見ることのできる窓外の空の景色はいよいよ生き生きとした夏がやって来たことを告げ知らせているが、それはもはや自分には無関係な景色だと思うと、見ているのがただ辛いだけであるから。
- ③ 自分に見えるのは空の景色だけであり、その空は確かに夏が来たことを告げ知らせているが、自分の実感ではそれを夏と捉えることができず、視覚と肌感覚の矛盾に混乱し続けるのを辛く感じるから。
- ④ 自分が唯一見ることができる空の景色はもう二度と見られないだろう夏の到来を告げ知らせているが、空などには関心のなさそうな彼の言葉を聞いて、自分だけそれにとらわれているのが辛くなったから。

問3 傍線部B「『夏や冬は、つまりぜいたく品になるのね』とあるが、これは物語の展開上どういうことを意味するセリフとして発せられていると考えられるか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号

は
17。

- ① 夏や冬は将来の自分たちには無意味なものになるということ。
- ② 夏や冬は人の地位を証すものに意味を変えていくということ。
- ③ 夏や冬は失われた豊かさとして記憶に残り続けるということ。
- ④ 夏や冬は自分にはすでに得難いものになっているということ。

問4 傍線部C「暑いって、どんなことなの？」とあるが、この物語において「暑い」とはどんなことだと考えられるか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

18。

- ① 失われてこそそれがかげがえのない経験だったとわかる人生の苦しみ。
- ② 死に向かって進んでいく人間に対して季節は循環し続けるということ。
- ③ 世界の真つ只中^{ただ}にあつてそれを直^{じか}に感じながら生きているということ。
- ④ なにかに守られながら無心に生きることのできていた子供の頃の幸福。

第3問

高校生のJさんは、後の【資料Ⅰ】～【資料Ⅲ】を基に「バリアフリー」「ユニバーサルデザイン」について考える【文章】を書いた。【資料Ⅰ】は「ユニバーサルデザイン」について説明した文章の一部、【資料Ⅱ】は「バリアフリー」「ユニバーサルデザイン」についての意識調査の結果の抜粋、【資料Ⅲ】は〈きざみ目のあるシャンプーの容器〉を開発したメーカーのウェブサイトにある文章の一部である。これらを読んで、後の問い（問1～4）に答えよ。（配点 20）

【文章】

現在の社会では、「バリアフリー」や「ユニバーサルデザイン」の考え方やそれらの必要性について、ある程度理解しているという人も少なくないだろう。だが、その「理解」は十分なものだと言えるだろうか。

【資料Ⅱ】の図1は、「バリアフリー」「ユニバーサルデザイン」とはどういったものかを簡単に紹介したうえで、「バリアフリー」化や「ユニバーサルデザイン」化の進みぐあいについての人々の考えを調査した結果である。「全体」および「性別」「年代別」の結果が挙げられているが、私が気になったのは

X

という点だ。各選択肢の判断の理由に関する調査・分析はないので確かかなことは言えないが、自分自身や友人たちのことを省みてみると、バリアフリーやユニバーサルデザインを特に必要とする当事者ではないせいとその進み方の不十分さに気づけていないという面もあるのではないか、という気がしてくる。

【資料Ⅱ】には、今後重点的にバリアフリー化、ユニバーサルデザイン化していくべき施設についての人々の考えの調査結果も示されている。私が気になったのは、年代が上がると「病院、診療所等の医療施設」や「官公庁施設」の割合が高くなり、年代が下がるほど「学校」の割合が高くなる、という傾向が見られる点である。これもやはり、自分（たち）にとって身近な世界にばかり意識が向いている、ということの一つの現れのようにも思えるのである。

【資料Ⅲ】は、「ユニバーサルデザイン」の典型的な事例としてさまざまな著作などに引用されている商品について、それを開発した会社が説明しているものである。これを読んで興味深く感じたのは、

Y

という点である。

バリアフリーやユニバーサルデザインを特に必要とする当事者の視点やその人たちが生きる世界を理解し自分たちの中に取り入れていくことには、単にそういった人たちの困難を解決することにとどまらない意義があるのではないかと思う。

Sample

第1回 国語

【資料Ⅱ】

【現状認識（全体）】あなたが日常生活や社会生活を送るうえで、どの程度バリアフリー化やユニバーサルデザイン化が進んだと思いますか。教えてください。

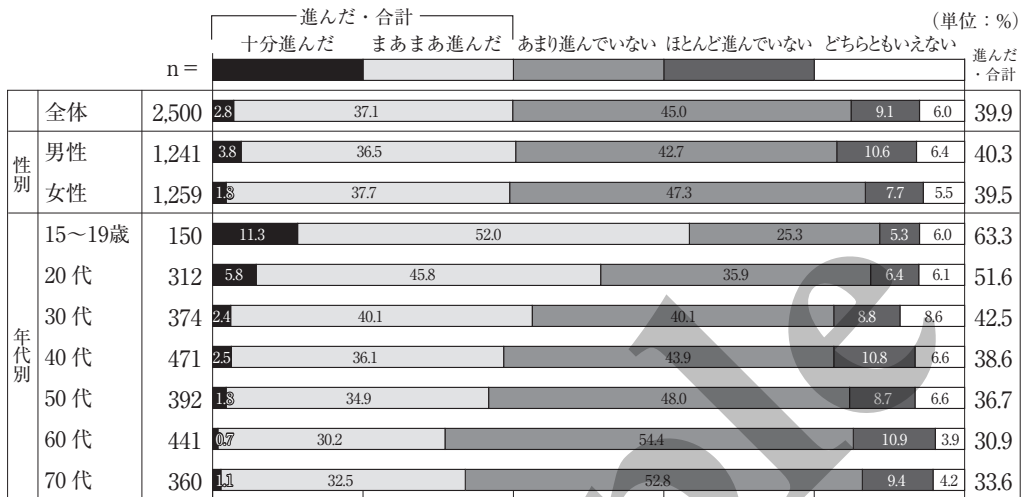


図 1

【施設（現状）】あなたは、下記のそれぞれの施設（建築物）を利用する際に、どの程度バリアフリー化・ユニバーサルデザイン化が進んだと思いますか。教えてください。

(※「利用しないのでわからない」を除いた回答数を母数として割合を算出。)

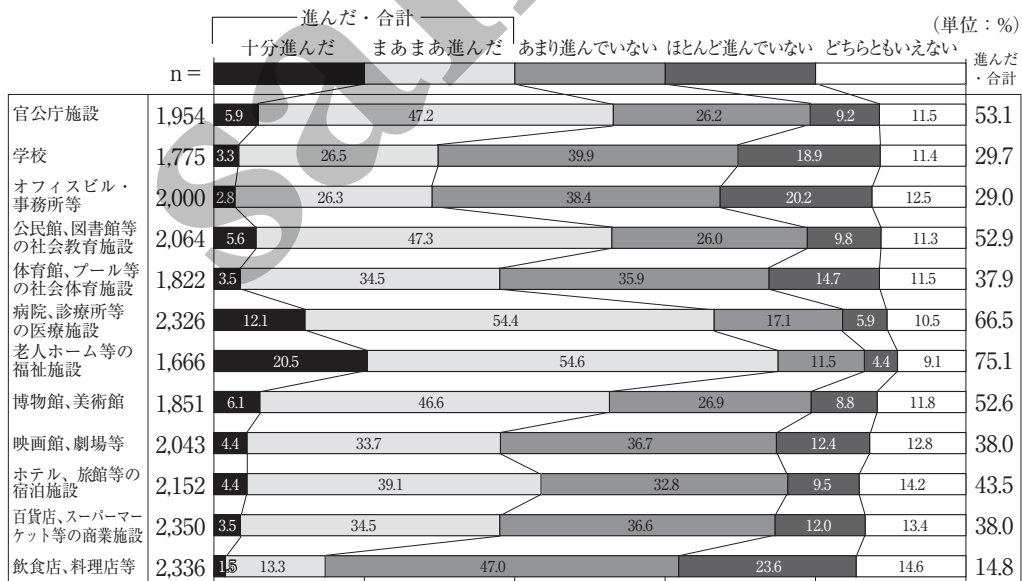


図 2

【施設（今後）】あなたは、それぞれの施設（建築物）について、今後、特にどの施設を重点的にバリアフリー化・ユニバーサルデザイン化していくことが必要だと思いますか。下記の中からあてはまるものを3つ（必須）教えてください。

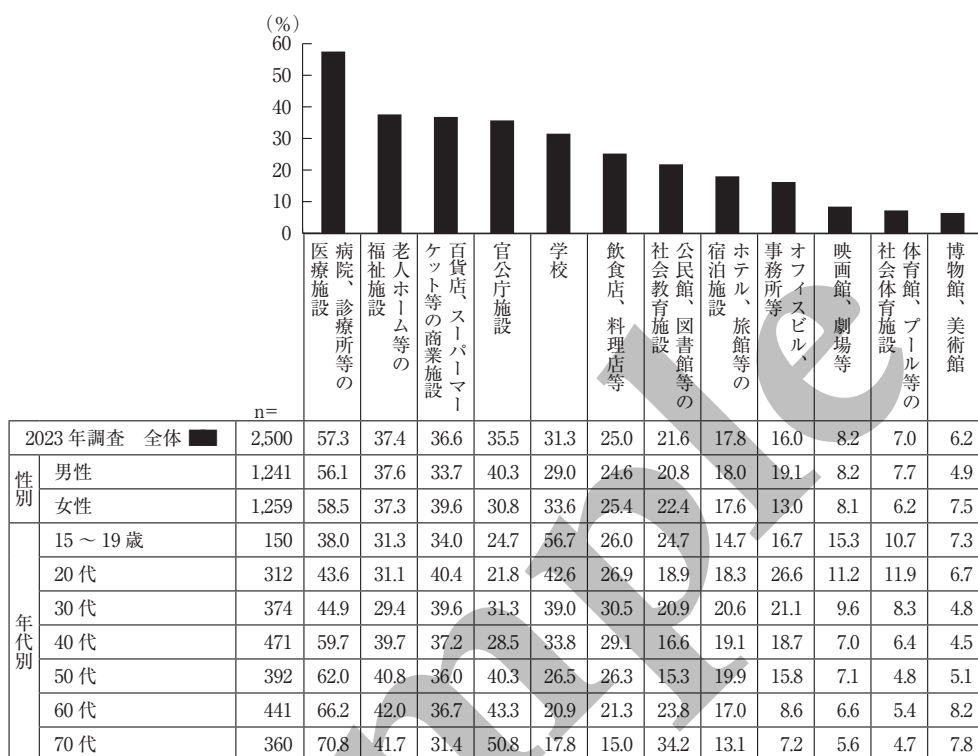


図3

調査概要

- 調査項目
バリアフリー・ユニバーサルデザイン、生活や社会でのバリアフリー化、心のバリアフリー等
- 調査対象
全国の15～79歳の男女
全国の性別・年代別人口分布を基に抽出
- 調査期間
令和5年 2月8日～2月13日
- 調査方法
調査会社の登録モニターに対するインターネット調査
- サンプル数
2,500人

（「令和4年度 バリアフリー・ユニバーサルデザインに関する意識調査報告書」〔内閣府〕をもとに作成）

問3 Jさんは、【文章】を読み返してみて、改善すべき点を考えた。Jさんが考えた改善点として最も適当なものを、次の

①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 22。

① 第二段落の「気づけていないという面もあるのではないか、という気がしてくる。」を、曖昧で自信のない言い方だと受け取られるのを避けるために、「気づけていない。」と言い切る形にする。

② 第三段落の「病院、診療所等の医療施設」「官公庁施設」「学校」について言及した箇所の後に、具体例を増やしよりわかりやすくするために、「商業施設については年代別の割合の違いはあまり見られない。」という文を加える。

③ 第三段落の「自分（たち）」にとって身近な世界にばかり意識が向いている」について、第二段落や第四段落とのつながりをより明確に示すために、「……向いており、それ以外の世界への関心や想像力がやや希薄である」とする。

④ 第四段落の「典型的な事例」という表現を、この箇所で伝えようとすることをより明確に示す言葉にするために、「類型的な事例」という表現に変える。

第2問

〈出典〉

山川方夫（やまかわ まさお）「暑くない夏」、「恋愛について」（それぞれ『山川方夫全集4』、『山川方夫全集6』筑摩書房所収）のいずれも全文。

山川方夫（一九三〇～一九六五）は日本の小説家。東京都生まれ。慶應義塾大学仏文科卒。短編小説の旗手として将来を嘱望されたが、交通事故により34歳で没した。代表作に『その一年』『海岸公園』『愛のごとく』などがある。『夏の葬列』は国語教科書に採用されることもあつて比較的よく知られている。

〈問題文の解説〉

本文は内容の展開から、前半〔冒頭～「頬に光の筋を引いた。」〕、後半〔「……やがて、彼は立ち上がった。」～末尾〕に分けることができる。

それぞれにおける状況の確認と人物の心情のあり方を解説していくことにする。

前半 Ⅱ 「夏」の喪失

〈「夏」の到来〉

「女」は仰向けに寝たきりで、部屋の中は天井も壁もシーツも白い。その白い部屋に穿たれた窓から「女」には空が見える、あるいは、空しか見えない。

その空の色が先日までの「水に落ちたケント紙のような」薄白い色から「真青な色」へと変化している。またそこには「むくむくした力こぶみtainな雲」も浮かんでいる。「夏が来た」のだ。

「女」は「声を落し」て「もう、一年になるのね」と言う。なぜ「声を落し」て言ったのか。その理由はもう少し後でわかる。

〈「女」の心意〉

「彼」はその「もう、一年になるのね」という「女」の言葉にうなずき、「夏」を告げる空を確認するが、二人の大学の話へと話題を逸らそうとする。

しかし、「女」はそれには乗らず、窓のカーテンを閉めてくれと頼む。「彼」がそれに応じてカーテンを閉めるとほっとしたかのように息を吐き（「女は、大きな呼吸をした」）、あまり悲痛な感じにならないように（「ふざけたような声で」）こんな話をする。

自分には、もう夏も冬もない。なにも感じられない。暑さも寒さも感じる事ができない。だから、夏は「他人の夏」であり、冬は「他人の冬」ではない。

二十歳の「彼女」は意識だけが明瞭で、全身が動かず、五官の感覚がほとんどない状態で死を待つしかないという病にかかっている。医者は最大限で一年しかもたないと明言しており、その一年の期限が目の前に来ている。

「女」が「もう、一年になるのね」と言ったとき「声を落し」たのは、それが自分の生の期限を意味するものだったからである。

また、「女」がカーテンを閉めてくれと言ったのは、窓の外に見える「夏」〔むくむくした力こぶみtainな雲〕に象徴される（生）の季節〕が自分にはもはや無関係なものになってしまっており、それを見るのが辛かったからであらう。

〈「ぜいたく品」になる「夏」〉

「女」の自分にはもう暑さを感じられないという言葉を受けて、暑さに汗をかく「彼」は、その言葉の深刻さや悲痛さを紛らわすように（「わざと明るい声で」）「うらやましいよ。暑さ知らずだなんて」と言ってみせる。

「女」はその「彼」のノリを受けて、文化が進歩して夏や冬の辛さを追放しえた未来の国に自分は住んでいるみたいだと言ってみせる。「彼」はさらにそうなると夏や冬はむしろ金持ちだけが味わえるものになると話を広げ、それに「女」が「夏や冬は、つまりぜいたく品になるのね」と応える。

しかし、夏や冬が「ぜいたく品」だというのは、この「女」にとつてこそそうなのである。もはやその暑さも寒さも感じられない「女」にとつてそれは「ぜいたく品」である。深刻さを紛らわそうとして展開した話は、結局、もとの深刻さに戻ってしまふ。

「女」は「夏」をもうはつきり思い出すこともできないと訴える。「夏って、

どんなものだったの？ 暑いって、どんなことなの？」そう言った「女」の目じりからふいに涙があふれる。

もう戻ってこない「夏」への悲痛な感情が「女」の心にある。

そして、それを「彼」はどうすることもできない。

後半 Ⅱ「同化と離反」

〈同化〉

「女」は涙の線を頬にのこしたまま眠っている。しかし、「彼」もずっとそこにはいられない。「女」の死期は迫っている。だから「これが最後かもしれぬという気持でしばらく」「女の顔」をみつめてから、病室のドアを押し、病院の表に出る。

「夏」って、どんなものだったの？ 暑いって、どんなことなの？」というさっきの「女」の声がまだ耳に聞こえている。

と、突然「彼」は足をとめる。

自分も夏の暑さを感じていない。夏のまぶしい日射しも消えている。つまり、自分にも「夏」がなくなっている。

まるで、自分も彼女と同じ世界に移行したかのように。

〈離反〉

しかし、それはごく実際の現象、夕立が来る前触れの気温・天気の変化にすぎなかった。

「彼」に「夏」がかえってきた。

「彼」は歩きだす。

〈同化と離反〉

自分にも「夏がない」と思ったのは錯覚にすぎなかった。しかし、その一瞬の錯覚だけが自分を彼女の住む世界に結びつけるものだったのかもしれない。そう「彼」は考える。

いよいよ夕立が本降りになってくる。「彼」は「わざと夏のその雨の中を歩きながら」「ハンカチで顔をふきつづけ」る。

あるいは「彼」は泣いているのかもしれない。もはや「夏」には決して戻

れない「女」の悲しみを改めて痛感し、自分の頬からも流れる涙を雨で隠しているのかもしれない。

が、そういう「彼」はもはや「夏がない」という一瞬の錯覚の中に「足をとめ」ていることはできない。その〈同化〉の錯覚に戻ることはできない。夕立は「夏」の雨である。「彼」は「夏」の真っ只中に生きて「歩きだし」ている。

〈設問解説〉

問1 語句の意味を判断する設問。

あくまで辞書的意味の範囲の中でその文脈に沿うものを選ぶ設問であり、文脈に当てはまるようであっても、その言葉はそうした意味では用いないというものは正解にならないことに注意。

㍀「声を落とす」は「声を急に低くして小声で言う」ことを意味する。〈声を殺す〉とはほぼ同義。正解は㍀である。

㍁「明言する」は「はっきり言い切る」ことを意味する。㍀が正解である。

㍂④について、「明言」は「言いたい内容をはっきりと言う」ことだが、「明瞭に言う」は「言い方がはっきりしている」ことである。また「明言した」というのは医者がはっきりと客観的な診断を下したということであり、その診断を「言い放った」というのはおかしい。

㍃「戦慄」は「恐ろしくてからだが震えること、おそれおののくこと」を意味する。それに「似たもの」というのだから、㍀が正解となる。

問2 人物（副主人公）の心理を読み解く設問。

〈問題文の解説〉前半の「女」の心意の説明、参照。

「女」にはもう「夏」を感じることができない。その意味で夏は「他人の夏」である。つまり、自分にはもはや無関係なもののようである。若い「女」にとって本来なら喜んで迎えるだろう盛んな季節である「夏」だけに、自分がもはや関われなくなったものとして遠く感じられるそれを見ているのは辛いだけである。窓の外の「空」はその「夏」を映し出している。だから「窓のカーテンを閉めて」と言ったのである。正解は㍀である。

他の選択肢の誤りを確認しておく。

① 「夏」の「空」の「光景が思いのほか眩しく感じられ、姿勢を変えられないだけに辛くなってきた」。このセリフの後に展開される「女」の心意からして「眩し」いから閉めてということではない。

③ 「空の景色」を「夏と捉えることができず、視覚と肌感覚の矛盾に混乱し続けるのを辛く感じる」。「女」は「空の景色」を自身の視覚で「夏」と捉えている。また「女」には「肌感覚」はない。

④ 「空などには関心のなさそうな彼の言葉を聞いて、自分だけそれにとらわれているのが辛くなった」。「女」が「カーテンを閉めて」と言ったのは、右に解説したような心意によると考えられ、「彼」の「学校の話をしようか?」という言葉が「空などには関心」が「なさそう」で「自分だけそれにとらわれているのが辛くなった」からとは受け取れない。その証拠にこのあと自分のとらわれている心意を「彼」に語っている。

問3 象徴的表現の意味を読み解く設問。

〈問題文の解説〉前半の「ぜいたく品」になる「夏」の説明、参照。

「物語の展開上どういうことを意味するセリフとして発せられている」とかという問い方に注意。セリフの内容そのものよりも、それを発している「女」の心理を読み取る。

「女」は状況の深刻さを紛らわそうとする「彼」との軽い話の中で、夏や冬の辛さを追放しえた「未来の国」では「夏や冬は、つまりぜいたく品になるのね」と言ったのであるが、それはそのまま自分にとってこそそうだといいるところに戻って来てしまう。もはや夏の暑さも冬の寒さも感じられない「女」にとって夏や冬は「未来の国」の「金持ち」以外の人びとと同様「味わ」うことのできないもの、すなわち「ぜいたく品」なのである。

④の「すでに得難いものになっている」がそれを言い得ている。これが正解である。

他の選択肢の誤りを確認しておく。

① 「無意味なものになる」。「ぜいたく品」の逆である。

② 「人の地位を証すもの」。確かに「金持ちだけがそれを味わ」える

ということを行っているが、ここで言いたいのは「得難さ」であって、それを享受する人の立場を言いたいのではない。

③ 「記憶に残り続ける」。味わえる人間には味わいうるから「ぜいたく品」なのであって、それは「記憶に残り続ける」存在ということではない。

問4 象徴的表現の意味を読み解く設問。

この物語における「暑い」は、「夏」の核心であり、それを感知する感覚をなくし死に近づいている「女」からすると「世界を直に感じながら生きていく」ということの証しである。「女」にはもはやそれが遠く、それを感じる事ができないのである。正解は③である。設問文の「この物語において」を踏まえて、最後の場面で「彼」に「暑さ」の感覚が消えたり戻ったりする意味を視野に入れると、③がよりふさわしいと判断できる。

他の選択肢の誤りを確認しておく。

① 「人生の苦しみ」ではない。

② 「季節は循環し続けるということ」。それなら「寒い」でもいいはず。そういうことではない。「女」が問題にしているのは「季節の循環」ではなく、「世界ひいては生きていくということの実感」である。

④ 「子供の頃の幸福」に還元する要素は本文にはない。「女」がこの言葉を使った元のセリフのところに「なにか子供のころに聞いた海岸の物音みたいな遠いばやけた思い出」というのがあるが、これをもって「子供の頃の幸福」ということはできない。また、最後の場面における「暑さ」とも整合しない。「なにかに守られながら無心に生きる」はさらに無根拠である。

問5 人物（主人公）の心情を推察する設問。

〈問題文の解説〉後半の「離反」の説明で確認したように、「夏がない」と感じられたのはごく実際の現象に理由があり、すなわち夕立が来る前

触れの気温・天気の変化にすぎなかったのである。つまり「彼に夏が来てきた」というのは、「夏がない」という一種の錯覚から抜け出して、